

2026.04.19.

「世の光であるキリスト」

旧約 イザヤ書60章1～4節

新約 ヨハネによる福音書8章12～20節

1. はじめに

イエス様は「わたしは世の光である。」と宣言されました。これはイエス様のご自分で、自ら神の御子であること、世界の目的・目標であること、世界の希望であること、真実であること、正義であること、良きもの全てを持ち、それを与えることが出来るお方であることを宣言されたということです。光がなければ、この世は闇です。闇は悪であり、不平であり、不満であり、妬みであり、強欲であり、罪であり、死であり、絶望です。そして光は善であり、正義であり、感謝であり、平和であり、命であり、希望であり、喜びです。何よりも光は神様であり、闇は悪しき霊です。このような光と闇の対比は、聖書の中に良く出てきますし、ほとんど全ての宗教においても出てきます。ですから、何の説明をしなくても「何となく分かる」でしょう。しかし、イエス様は「何となく」ではなく、明確にご自身が「世の光」であることを自覚してこのように宣言されました。そして、「わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」と告げられました。つまり、世の光であるイエス様に従う者は、光の中を歩み、命の光を持つようになる。イエス様はご自身が光であるだけでなく、その光をイエス様に従う者に与えられるお方だと宣言されたわけです。これはイエス様の宣言であり、約束です。私共は今朝、このイエス様の宣言と約束を告げられます。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」命の光です。私共は既に命の光持って、光の中を歩む者とされています。

2. 世の光

さて、皆さんは「光」と言えば何を思い起こされるでしょうか。聖書には幾つもの光について告げられているところがありますが、その中から2カ所を見てみましょう。一つは今お読みしました旧約のイザヤ書60章の最初の所です。「60:1 起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り／主の栄光はあなたの上に輝く。 60:2 見よ、闇は地を覆い／暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で／主の栄光があなたの上に現れる」これは、光り輝く主が来られて、主によって神の民が救われることを預言しています。イザヤの目の前に広がっているのは「闇は地を覆い／暗黒が国々を包んでい」る現実です。神の民は打ちひしがれ、希望を失い、悲しみに包まれています。

す。理不尽な力によって虐げられ、どこに正義があるのか、どこに希望があるのかとの嘆きが満ちています。そのような神の民に向かって、イザヤは告げました。まことの光である主が来られる。その時、神の民はこの方によって照らし出される。闇の中にうずくまっていた神の民に「**起きよ、光を放て**」と告げられる。神の民には、そんな力も気力もありません。しかし、まことの光である主が来られたなら、光り輝く主に照らされて、顔を上げ、起き上がることが出来る。この主の光ることが出来る照らし出された神の民の顔は喜びと感謝と希望に満ちて、光に輝く顔となります。そして、歩み出す。光に向かって歩み出す。イエス様は、ご自身がこのイザヤが預言した主であると宣言されたのです。

もう一カ所。ヨハネによる福音書1章4. 5節「**1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。 1:5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。**」そして、9節「**1:9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。**」このヨハネの福音書の1章において告げられている「**人間を照らす光**」「**まことの光**」。これは神の御子である主イエス・キリストを指しています。光が来なければ、人は闇の中にうずくまったままにいるしかありません。イエス様が来られるまで、人間は、またこの世界は、まことの光を知りませんでした。ですから、悪しき霊や悪しき力、そして自らの罪に捕らえられたままでした。自分の思いのままに生きることを当たり前のことだと思っておりました。そり以外の生き方を知らなかったからです。しかし、イエス様が来られました。私共を包み、捕らえていた闇が、光であるイエス様の到来とともに退きました。全く新しい時代が始まりました。世界が変わりました。光が来れば、闇は退くしかありません。もはや闇はこの世界を支配する者ではなくなりました。

この箇所はクリスマスの時期によく読まれます。クリスマスのアドベントクランツやキャンドルサービスのローソクの光、これはまことの光であるイエス様、そしてイエス様によってもたらされた光を示しています。確かに今でも、私共を取り囲む世界は、まるで闇に覆われているかのように、次から次に様々な問題が起きます。そして、マスコミはそれを煽るかのように「不安だ、心配だ、どうなるのだ」と騒ぎ立てます。しかし、本当にそうなのでしょうか。私にはとても知らなければならないニュースが流されているようには思えないことが良くあります。本当に世界はいつでもどうしようもない不安が渦巻いているのでしょうか。私共は次々に起きてくる問題に振り回され、いつも不安で仕方がないのでしょうか。まことの光であるイエス様が既に来られたのではないのでしょうか。

3. 命の光を持つ

イエス様は「**わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。**」と約束されました。イザヤ

が「**起きよ。光を放て。**」と告げられたように、まことの光であるイエス様イエス様に従う、つまりイエス様を信じて救われた者は、命の光を持つこととなります。ただ光を仰ぐだけではありません。まことの光であられるイエス様と一つにされて、自らが光を持ち、光を放つこととなります。それは具体的には、罪や欲や悪しき霊の支配の下に歩むという暗闇の歩みから解き放たれ、神様・イエス様の御心に喜んで従う者として歩む者になるということです。そこに命があります。それはイエス様が三日目に復活された命、復活の命、永遠の命です。私共は既にイエス様の復活の命を宿し、その光を放つ者としていただいています。それは、イエス様を信じ、愛し、お従いする者になったら、良い人になったというレベルの話ではありません。悲しみも嘆きも苦しきも、妬みも怒りも不安も、私共をもはや支配することが出来なくなったということです。勿論それは、もう悲しなくなったり、嘆かなくなった、妬まなくなった、怒らなくなったというようなことではありません。苦しきも不安も感じなくなったということではありません。それは、私共が肉体を持っている以上、私共がそれらを全く味あわなくなるということはありません。実際、色んなことが起きるのであります。しかし、それでも私共はそのような闇に支配されることはなくなりました。悲しんでも、嘆いても、苦しんでも、妬んでも、怒っても、不安になっても、最早それに支配されることはありません。それは、どのような状態になっても、完全な闇の深みに落ち込んでしまうことが無くなったということです。何故なら、私共の内にはイエス様が与えてくださった光が宿ったからです。この光は、肉体の死によっても消すことの出来ない光、命の光です。最も大いなる闇。誰も吹き払うことの出来ない、最も大いなる闇。それが死です。しかし、イエス様が私共に与えてくださった光は、この死の闇さえも退かせます。

4. 光の中を歩む

まして、イエス様を知らなかったときに身につけてしまっていた、悪しき習慣、それは日常的な習慣から、心の習慣まで様々ですけれど、それから私共を解き放ってくださいます。勿論、あっという間にそのようにはならないかもしれませんが、でも、慌てることはありません。少し時間がかかるでしょうけれど、確実に変えられていきます。何が大切であり、何が喜びなのか、何を求めるのか。それが変わってきます。イエス様に教えていただいた主の祈りを祈り続けていく中で、私共は内側から変わっていきます。自分がみんなに褒められ、たいしたもんだと言われることが嫌な人はいません。しかし、それ以上に「御名が崇められること」が大切であり、喜びであり、求めるようになっていきます。私の思いが実現される、自分の願いが叶えられる。それは誰にとっても嬉しいことです。しかし、それ以上に「御心になること」「神様の栄光が現れること」が大切であり、喜びであり、求めるようになっていきます。命の光を持つからです。パウロはこのような歩みを「5:8

あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。」(エフェソ5：8)と告げました。とても有名な言葉です。

私はこんなイメージを持っています。イエス様を信じて従うことによって、私共は今まで考えたことも無かったほどの尊い、光り輝く玉のようなものを受け取った。これが私共の内側から光を放ち、私共を光の中を歩む者へと導いていきます。この光り輝く玉のようなもの、これを内住のキリストと言ったり、イエス様の命の光と言った、聖霊と言ったりします。同じことです。これは外側からは決して見えません。しかし、確かにあります。それは、真っ暗な、汚れに満ちた、悪しきものしか無いような私共の心の一番深いところに、全ての闇を退かせるように静かに、しかし確かに輝き続けています。イエス様を信じたときから、この命の光が私共の中に宿りました。この光を消すことの出来る闇など、この世界にはありません。何故なら、その光は天地を造られた父なる神様の光だからです。この光を与えられていないキリスト者は一人も居ません。そして、その光は「世の光」ですから、私共の心を照らすだけで終わるはずがありません。この光は私共を、そしてこの世界を照らし、御国へと導いています。楽観的と思われるかもしれませんが、この二千年の間に世界は御国に向かって変えられ続けていると私は思っています。

5. ユダヤ教における証し

さて、このイエス様の宣言と約束をファリサイ派の人達は受け入れませんでした。その言い分はこういうことでした。「あなたは自分について証しをしている。その証しは真実ではない。」これは旧約に複数の者の証言で無ければ有効では無いと告げられていた(民数記 35:30、申命記 17:6、19:5)からです。要するに、「お前が勝手に言っているだけではないか。どうしてそんなことを信じられるか。」と言ったわけです。確かに、これが通るなら、誰でも「言った者勝ち」になってしまいます。ファリサイ派の人達の言い分も分からないではありません。しかし、イエス様は引きません。14節から 18 節までイエス様は話されましたが、要するイエス様は「私だけでは無い。父なる神様が私について証しをしてくださる。」と言われられました。ファリサイ派の人達は「だったら、あなたの父(つまり神様ですが)はどこに居るのか。」と問います。イエス様は「あなたたちは、私もわたしの父も知らない。」と答えました。

これは、「鶏が先か卵が先か」と同じようなことになります。イエス様が神の御子である、キリストであるということが分かれば、イエス様の父が神様であることも分かりますし、イエス様が告げられたことが真実であることも分かります。しかし、イエス様を神の御子と認めなければ、父なる神様も、イエス様が告げたことが真実であることも分からない、ということになります。これは、イエス様を信じるならば神様も分かるし、光が自分に与えられることにもなるけれど、イエス様を

信じなければ神様も分からないし、自分に光が与えられることも分からないということになります。これは、私共の経験に照らし合わせて本当のことでしょう。私共は神様が分かったから、イエス様が言われたことが本当だと分かったからイエス様を信じたのではありません。不思議なようにイエス様を信じる者にさせていただいて、神様が私を愛してくださっていることも、神様が私を造ってくださったことも、光を与えられて、光の中を生きる者としていただいたということも分かりました。

「イエス様をわが主、わが神として信じる」という所から全てが始まったわけです。このことを11世紀の神学者アンセルムスは「私は理解するために信じる」と言いました。私共は信じることによってイエス様が語り、聖書が告げていることが分かるようになった。逆では無いんですね。ファリサイ派の人達はイエス様を信じないわけですから、イエス様の言われたことも分かりませんし、父なる神様のことも分からなかったわけです。先ほど私は「不思議なようにイエス様を信じる者にさせていただいて」と申しました。私共が特別信仰的だったわけでも無く、特別善人だったわけでも無く、特別熱心に求めたわけでもありません。しかし、イエス様を信じる者へと導いていただきました。これは神様の恵みによって、神様の御業によって、神様の選びによってとしか言いようがありません。まことにありがたいことです。そうして私共はまことの光を知り、まことの光を与えられ、まことの光の中に生きる者にさせていただいたわけです。分かったら信じる。理解できたら信じるでは、いつまでたっても知ることは出来ないということです。

6. どこから来て、どこへ行く

イエス様とファリサイ派の人たちとのやり取りの中で、一つ注目しておかなければならないことがあります。それは、イエス様が「**ご自分がどこから来て、どこに行くのかを知っている**」(14節)と言われたことです。そしてこのことを「知っている」ということが、自分が神の御子であることの証し、証拠だと言われた。そして、ファリサイ派の人達には「**あなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない。**」と告げ、それはあなたたちが自分が何者であるかを知らないということだと告げました。確かに、人は自分がどこから来て、どこへ行くのかを知りません。しかし、それがどうして自分が何者であるかを知らないということになるのでしょうか。それは、自分がどこから来て、どこへ行くのかを知らないということは、結局のところ自分が生きていたことしか知らず、自分の命の根源、そしてこの地上の命が終わってからのことは知らないということだからです。現代風に言えば、「神なき世界の知識」というものの限界、あるいは科学的な認識の限界と言っても良いでしょう。しかし、イエス様は知っておられました。イエス様が天の父なる神様の元から来られて、天の父なる神様の身許に帰る、このことを知っていると言われたわけです。ここでイエス様はクリスマスの出来事と昇天の出来事を言われたわけですが、これは自分

という存在というものが永遠に生き、全てを御支配されている父なる神様と分かつことなく繋がっているということを告げたわけです。

では、私共はどうでしょう？イエス様を信じるまで、私共は自分がどこから来て、どこに行くのかわかりませんでした。しかし、今は知っています。イエス様と信仰によって一つに結ばれたからです。私共の命の源は父なる神様にあり、この方によって命を与えられ、それぞれの場に遣わされました。イエス様が父なる神様を「わたしをお遣わしになった父」(18 節)と言われたように、私共も父なる神様によってそれぞれの場所に遣わされて、今という時を生きています。そして、私共はこの地上での命が閉じられたならば、天の父なる神様の御許に行くことになる。そのことを知っています。これは、イエス様を信じることによって与えられた知識です。このことを知っている者として、私共は一日一日を神様の御前に、イエス様の光を受けた者として生かされているということです。なんとありがたいことでしょうか。使徒パウロはこの恵みを「 8:31 …もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。 8:32 わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。…… 8:35 だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。…… 8:38 わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、 8:39 高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」(ローマ 8:31~39)まことにその通りです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、御言葉を通して、私共一人ひとりに「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」と宣言し、約束してくださいました。その約束の通り、私共はイエス様の命の光をいただき、感謝と喜びと希望をもって一日一日を歩ませてくださいます。体調を崩したり、困ったことが起きたり、様々なことが起こります。しかし、イエス様と結ばれた愛の交わりの中に私共は生かされています。まことにありがとうございます。私共に与えられている驚くべき恵みを、私共がしっかり受け止め、遣わされている場で、あなた様に愛され、救われた証人として歩いていくことが出来ますように。弱く愚かな私共を励まし、導いてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン